一宮らしさを見つけよう！

近代の文化建築をひも解く。

古き良き建造物はそのまち固有の文化的アイデンティティの象徴として地域の特色を創る重要な要素であり、財産です。たとえ身近な建造物であっても、再び造ることのできないものは立派な文化財産です。名古屋市覚王山地区や白壁文化のみちなどはそんなまちの財産を地域活動資源、観光資源として活用している好事例であり、このことからも市民の地域に対する愛着や地域性の創出につながり、まちの活性化につながることが期待できます。また、そこで生まれ育つ子ども達にとって美しい街並みや文化に触れることは、まちの歴史や文化を伝えていく上で自然環境や人間関係と同様に大切なことではないでしょうか。

一宮市庁舎は建替の計画が進んでいます。全国的に貴重な近代建築が存続の危機に瀕し、文化遺産や美しい街並みが失われつつあるなかで、私たちの一宮市においても文化財産は本当に少なくなってきました。一宮市庁舎は西分庁舎が旧東海銀行一宮支店として大正１３年に、本庁舎北側が昭和５年にそれぞれ建てられました。当時の活気あるまちの面影を今に残し、私たちにまちの文化を伝えるとともに、貴重な都市景観を与えてくれています。

これらの一宮市のまちの宝の価値を再認識し、これからのまちづくりに活かしていくために、市民である私たち自身がまちの文化や歴史のことをもっとよく知る必要があるのではないでしょうか。

第１回　見学会

一宮市庁舎及び西分庁舎

と　き　平成20年12月18日(木)午前10時
ところ　一宮市役所東新柳公園集合
問合せ　一宮文化建築研究会(仮)
担当：安井090-1753-2248

一宮文化建築研究会(仮)の活動内容

定期見学会
定期勉強会
講演会
ワークショップ

※ご一緒していただける仲間を募集しています。お気軽にお問い合わせください。

朝日　2005年(平成17年)7月14日(木曜日)

市役所庁舎など3施設

一宮の建築物を〝鑑定〟

名古屋大学大学院環境学研究科の西沢泰彦助教授らのグループが十三日、大正末期から昭和初期にかけて建設された一宮市役所一宮庁舎、西分庁舎、木曽川町資料室の三施設を建築史の観点から調査した。西沢助教授は「当時の最先端の西洋建築として価値ある建築物」と評価している。（広瀬和実）

名大助教授ら調査

西沢助教授は豊橋、岡崎、刈谷、津島など県内の地方都市に残る近代建築を調査している。この日は、一宮市博物館学芸員の案内で、研究室の大学院生二人と施設を巡り、建設当時の設計図や資料などを確認した。

市役所旧館と呼ばれる一宮庁舎の北側は、一九二〇（昭和五）年に鉄筋コンクリート二階建てとして建設。鉄筋コンクリート造りの銀行建築としては県内最初とされる。西沢助教授は「一階部分は部屋で仕切られないオープンカウンターの構造。これは今では珍しくはないが、当時ではおそらく日本初。市民サービスとしては画期的だった」と話す。カウンターは現在大部分が撤去されている。

隣接する西庁舎は一九二四（大正十三）年、旧名古屋銀行一宮支店として建設。鉄筋コンクリート二階建てで、もともとは一、二階部分が吹き抜けだったが、八〇（昭和五十五）年に市が取得し、二階の間に天井を張り、一、二階の間に天井を張り、一階部分は部屋で仕切られないオープンカウンターの構造。これは今では珍しくはないが、当時ではおそらく日本初。市民サービスとしては画期的だった」と話す。カウンターは現在大部分が撤去されている。

珍しい構造も「面白く価値ある」

大正期の西洋建築として価値ある一宮市役所西分庁舎を調査する西沢助教授（一宮市本町で）

心都市の銀行として典型的な西洋建築。ないホール風の造りは、天井を取り外し市民開放スペースとして利用できれば面白い」と西沢助教授は話す。

同助教授が最も興味を示したのは、同市木曽川町の木曽川町資料室に「絶物」と解説する。

日本建築が融合し、当時としては非常に珍しい建築物」と解説する。

接する蔵。資料室は旧木一連の調査をした西沢助教授は「建築史を学ぶ上で面白い施設ばかり。いずれも現在使用されている施設だが、何とかうまく使いながら残しても壁が鉄筋コンクリート屋根は木造。西洋建築と

一四年建設。蔵も同時期に建設された。「蔵は外